

埼玉育ちのグローバル人

Hakuna matata! ケニア子育て体験記

第1回 「Jumbo!

ナイロビ生活スタート」



埼玉県マスコット
「コバトン」



今村 玲子さん

「日本人学校決まったよ！ケニアだって！いいかな？」それは職場にいる夫からの電話。海外で仕事をする夢を持っていた夫は世界各地にある日本人学校へ行くための試験を受け合格していました。問題は行き先。その日、教育委員会からナイロビ日本人学校へ赴任できるかと連絡がありました。返事は4時間以内にとのこと。「アフリカはちょっと・・・」などと返事したら、赴任の話はなくなるでしょう。ケニアと聞いて思い浮かぶのは野生動物がいる所！という位です。でも、これは断れる話ではないということは分かりました。私の返事は「がっちゃん（1歳の息子）にぞうさんやキリンさんを見せられるね。」だったとか。嫌がると思っていた夫はホッとしたそうです。

赴任が決まりました。どんな気候？子ども連れで行くのに何が必要？予防接種は？今のようにネットで検索という技もなく、ケニアについて知ろうとすれば図書館に行って調べる時代です。幼い子どもを抱えて出国準備に右往左往する私。母に「単身赴任してもらえないの？」と言われる始末です。子育て中の娘を持つ今の私には、当時の母の心配がよく理解できます。折しも1985年に日本で初めてHIV感染者が報告され、日本はちょっとした「アフリカ起源のエイズパニック」状態でしたから、周りの人たちが心配するのも仕方ないことです。

あの電話から3ヶ月後、1987年4月、私達は日本から1万9千キロ離れた、アフリカ大陸ケニア共和国にいました。長男岳（がく）1歳6か月。任期は3年間です。荷物の中には次の赤ちゃん用に産着や布団を入れてありました。でも、アフリカで出産するイメージなんて全くなし！若さとは怖いもの知らずです。



ナイロビ到着直後 岳1歳6か月

生活が一変したのは言うまでもありませんが、その中でも日本では考えられないことの一つは「お手伝いさん」がいることでした。ケニアではメイドを雇う必要がありました。家にいつも他人がいるということは、考えられないことでした。ワーカーとのトラブルについて先輩の方から色々聞いていましたので、どんな人を雇ったらいいのか、どんなふうに接すればいいのか緊張しました。

当時、メイドやドライバーなどの職に就くケニア人の月給は約700シリング（約4,900円）。男性

女性にかかわらず、現地の人にとっては悪くない金額でした。しかし、700 シリングは、我が家にある輸入品の洋酒 1 本分の値段でした。その格差に私は戸惑いました。私達の持っている日本製の電化製品や衣料品は彼らにとって夢の品々です・・・彼らはどんな気持ちでそれらを見ていたのでしょうか。

ケニアの人たちは「キオスク」という店で買い物をします。小さな小屋ですが、コンビニのように品数は豊富です。そこでタバコを 1 本ずつ買うのですが、それを買えない人に少し余裕のある人が買ってあげます。煮炊きに使うコンロ（七輪）の燃料ケロシンをきらすと、ポリタンクに残量のある人が分けてあげます。持っている人が持っていない人に分けてあげるのがケニアでは当たり前のことです。ですから、彼らは私達にも悪気なく色々要求してきます。ワーカーは「友人が引っ越すので車を貸してくれないか?」「職を失った友人がいるので雇ってもらえないか?」等々、ダメもとで聞いてきます。どれも彼らにとっては普通の話。そして、どれも私達にできること。でもどこまで提供すべきか、いつも悩みました。このようなちょっとした感覚の違いが、話に聞いていたトラブルへとつながっていくのでしょうか。



ワンガリーさんの部屋で

さて、メイドは、私達と入れ替わりで帰国された先生のもとで働いていた女性を紹介してもらえました。日本人の気質をよく理解していて、子育て経験もあり息子をととても可愛がってくれました。彼女の名前はワンガリーさん。岳は「ワンガリー、ワ

ンガリー〜！」と独特のイントネーションで彼女を呼び慕っていました。私はその言い方が大好きで、今でもその声を思い出します。「チャクラ、クッキング、アチチッ、カミン!」（ごはんを作ってるの、熱いから気を付けて!）二人はスワヒリ語、英語、日本語のちゃんぽん語で会話していました。岳は休憩中の彼女の部屋を訪ね、ちゃっかりチャイ（ミルクティ）をごちそうになっていることも(笑)。ケニアでの3年間、大変なことも色々ありましたが、生活の基本的な部分で安心していられたのは、我が家のメイドがワンガリーさんだったからと言っても過言ではありません。

メイドを雇うことは出国前に聞いていましたが、一軒家を選択したことでアスカリ（警備員）とシャンバ（庭師）を、妊娠したことで出産前後はドライバーと総勢 4 人を雇っていた時期もありました。知り合いからの紹介で集まった我が家のスタッフは、ケニア人とは思えない!!! 時間や決まりをきちんと守るたち人ばかりでした。家の事情を全て知られているのですから、彼らとの信頼関係がなくては落ち着いて生活することはできません。治安のよくないアフリカで幼い子どもとのんびりと生活できたこと、我が家のワーカーさんたちに今改めて感謝せずにはられません。



我が家のワーカーさん達とおなかにはもう一人家族が!

幼い息子がアフリカの人たちを見て驚いたり、怖がったりするのではないかと心配しましたが、杞憂に終わりました。ケニアの人たちはみな陽気で、日本人の子どもを見かけると「Mtoto!」（こども）、「Jumbo!」（こんにちは）、「Habari?」（ごきげんいかが?）と笑顔で声をかけてきます。日本

語もまだ片言の岳や友達は彼らを「ジャンボさん!」と呼んで例のちゃんぼん語を使って遊んでもらっていました。

心配や不安はありましたが、深く考える暇もなく、ナイロビの生活がスタートしました。



予定どおり??キリンさんに会えました!